

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

4競技のワールドカップ・ファイナル、 ライプツィヒで開催



ライプツィヒでのワールドカップ・ファイナル2011
©Kit Houghton/FEI

フォルカー・ヴォルフ（写真下）は前世紀90年代初頭以降のドイツにおけるもっとも重要な馬術イベントのオーガナイザーのひとりだ。ヴォルフ氏の会社、エンガルデは毎年ハンブルク、ミュンヘン、ゲラーでのイベントを開催するという実績を持つ。

1999年ごろ、ドイツ選手たちの間ではフォルカー・ヴォルフがかつてのドイツ連邦民主国（東ドイツ）の古都、ライプツィヒにある新しいフェアビルディングで開催した全国規模の馬術イベントが話題になり出していた。私がそうした選手に聞いたところによると、ライプツィヒのイベントは特別なものだったと異口同音に言う。

2002年の障害飛越ワールドカップ・ファイナルはイタリアのポロニーヤでの開催が決定していたが、01年早々に経済状況から開催を辞退することになった。当時私はワールドカップのディレクターを務めており、その立場から早急に代替地を探さなければならな

かった。まず、当時西ヨーロッパリーグが形成されており、その西ヨーロッパで行われている14の正式競技会を洗い直した。実はこのとき20年間にわたり障害飛越競技のスポンサーを務め、1998年の1年で1千万スイスフランを提示していたボルボがスポンサーを降りてしまい、別のスポンサーが見つからない状況にあったため、西ヨーロッパの大会組織は急な申し出を受けそうにはなかった。なんといいっても通常の大会に比べ、ワールドカップの経費はおよそ2倍になる。通常の大会が2百万スイスフランのところワールドカップは350万スイスフランを要するのだ。

私は範囲を広げ、そのほかの候補地を探した。デュッセルドルフが前向きな関心を寄せていた。しかし、私の胸中にはライプツィヒがあった。2001年のスウェーデン、ヨーテボリで行われたワールドカップ・ファイナルで、当時フォルカー・ヴォルフのビジネスパートナーであったポール・シヨッケメーレと話した。ポール・シヨッケメーレからライプツィヒ開催への前向きな意向を聞いた。しかし、FEIのワールドカップ組織委員会はライプツィヒに対して、国内大会の経験があまりない場所での開催に消極的だった。しかし、私はライプツィヒでの開催に傾いており、最終的にフォルカー・ヴォルフと合意に達した。そして、私はミーティングのためライプツィヒに向かった。

このミーティングに顔をそろえたのはフォルカー・ヴォルフとエンガルデのチームはもちろんのこと、ドイツ馬術連盟の事務局

長、ハンフレッド・ハーリングとさらにこのイベントに大いなる期待を抱きライプツィヒフェアで実務の手堅さを見せてくれた面々、機動力を誇るライプツィヒ市長、ウォルフガンク・ティエフエンシーとザクセン州の州立議員たち。

2002年4月に開催されたライプツィヒのワールドカップ・ファイナルは大きな成功を収めた。観客席はほぼ満員が続き、VIPエリアも盛況で、ワールドカップのチャンピオンとなったオットー・ベツカーの試合ぶりも申し分なかった。このファイナルの翌日に行われたワールドカップ委員会のミーティングでライプツィヒは今後永続的にウエスタンリーグに加盟すべきであり、これまで十全に運営されているとは言えなかったベルリンでのCSI-Wをライプツィヒでの開催にするという結論に議論の余地なく達した。



フォルカー・ヴォルフ氏
©Thomas Hellmann

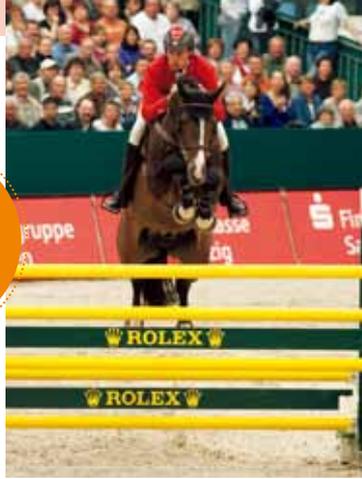
でも特筆すべきなのがVIPエリアでのサーブやシャトルサービスに従事するボランティアたちの存在だ。その多くはライプツィヒの大学生だという。

2002年当時に深く印象に残り、それが今も変わらないことが観客の態度がほかの大会とは大きく違うことだ。たとえばドルトムントの大会と比較してみると、ライプツィヒの観客は自分の席を探すときも、休憩時間に混雑の中を抜けるときもわれ先という気配がなかった。さらに重要なこととして、誰もが競技を熱心に見守り競技内容を正當に評価しようとする態度が挙げられる。選手の努力に大きな拍手を送るとともに、失敗を共に残念がるのだ。

初のライプツィヒ開催

こうした実績から2011年の障害飛越のワールドカップの開催地としてライプツィヒが選ばれたことに不思議はない。さらにFEIはフォルカー・ヴォルフに馬場馬術と4頭立てドライビングのワールドカップ・ファイナルの

試合結果



優勝したクリスチャン・アールマン。
©Kit Houghton/FEI

障害飛越

障害飛越は2005年のヨーロッパチャンピオン、クリスチャン・アールマンが優勝した。アールマンは友人であり同じく07年のヨーロッパチャンピオン、マルコ・クッチャーと同日で最終日の試合を開始した。また、08年のオリンピックチャンピオンであり多くの期待を集めたエリック・ラマーズとヒックステッド号は3つのファイナルの2競技を終えて、上記の2人のドイツ人とオランダのジェルコ・シュローダー、ニュージーランドの若手、ケイティー・マクヴィーンに続き5位。日曜の1ラウンド目はクッチャーとラマーズがクリアラウンドを達成。アールマンとマクヴィーンが1落下(マクヴィーンは最後の最後での落下)、シュローダーは8ポイント減で戦線を脱落した。この日の最終ラウンドで、ケイティー・マクヴィーンは5ポイント、ラマーズは4ポイントで勝利への道を閉ざされた。クッチャーは1落下で持ちこたえ、この段階で2人のドイツ人対決となった。2人のうち先にスタートしたのがアールマンとガルベの子、タルベZ号。クリアラウンドを果たし、4ポイントのまま。マルコ・クッチャーとキャッシュ号は重圧と5日間の疲れで最初の障害を落とし、さらに2障害を落とし、12ポイントでアールマン、ラマーズ、ジェロエン・ダブルダムに続く4位となった。

馬場馬術

アデリネ・コーネリセンとパーズバル号はなんといっても一番人気。この人馬はグランプリでまず80.957を出し、その実力を知らしめた。これを追うのがデンマークのナターリエ・ツィ・ザイン・ヴィトゲンシュタインの76.884、ドイツのウルラ・ザルツゲバーの76.216。グランプリ・フリースタイルは順当にこの順位をキープした。オランダ人馬、コーネリセンとパーズバルが84.804、デンマークのベネディクト王女の娘、ナターリエが80.036、2002年のワールドカップチャンピオン、ウルラ・ザルツゲバーは78.821で3位。



左からヴィトゲンシュタイン、コーネリセン、ザルツゲバー。
©Kit Houghton/FEI



優勝したボイド・エクセル。
©rinaldo de Craen/FEI

ドライビング

4頭立てドライビングの大方の予想は2009年2010年のチャンピオンであるイギリス在住のオーストラリア人、ボイド・エクセルに集まった。ボイド・エクセルはオープニングの初戦から唯一のクリアラウンドを達成し、ファイナルの1ラウンド目から1位を確保し(1コーンのみ)、最終ラウンドではクリアラウンドの上、最速で幕を閉じた。2位はハンガリーのジョゼフ・ドプロビッツ、3位はオランダのヤズブランド・シャルドン。

ヴォルティンク

世界チャンピオンのパトリック・ルーザー(スイス)が初のヴォルティンク男子のワールドカップ・ファイナルを勝利した。1ラウンド目は、フランスのニコラス・アンドレアニに僅差で抑えられたが、2ラウンド目は明らかにフランス選手を上回り、8.793対8.247でアンドレアニに勝った。女子のヴォルティンクでは2人のドイツ人が優勢で、ジモネ・ウィーグレがアンティエ・ヒルを下した。



左はルーザー、右はヴィーグレ。
©Matthew Lewis/Getty Images for FEI

エンガルデは4競技のファイナルをめぐりに運営したが、観客と報道陣にとって少々残念な点があった。試合スケジュールが重なり、観客はすべての競技を見ることは叶わず、メディアは報道するという立場からさらに観戦できる競技が限られてしまった。FEIでもっともメジャーな競技である障害飛越はいつものようにメディアの注目を集め、馬場馬術も十分に報道された。そのあおりを食ったの

から。そのまま鼻高々ということはないが、やはり4競技のファイナルを託されたことの誉れはまさに夢の実現というところだろうか。ヴォルフにとってこれは挑戦ではあるがエンガルデの組織力と有能なボランティアの力があれば必ずや成し遂げられると心に期すものがあった。実際、彼は成し遂げたのだ。シャトルサービスで明らかに人を詰め込み過ぎていたなどといった暇さんはあったが、全体を見れば大過はなかった。16日間にわたり8競技をこなす世界選手権と違い、通常は障害飛越1競技を行う5日間で4競技を開催したので

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかたわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。

がドライビングとヴォルティンクだった。その充実ぶりに見合うだけの注目を得られなかったのが惜しまれる。この結果に対しフォルカー・ヴォルフが4つの競技のファイナルの開催を引き受けたことが原因だと非難することは誰にもできない。FEIにはそのような競技の詰め込みで何が起きるかを事前に判断できる者は一人もいないのだから。FEIにとって2009年のウインザーでのヨーロッパ・チャンピオンシップにおいて障害飛越と馬場馬術の2競技の同時開催で観客が減ったという過去の経験があるのみなのだ。とはいうものの、5つのファイナル(ヴォルティンクは男女別なので、1競技でファイナルは2つになる)はすべて充実した内容だった。馬場馬術、ドライビング、ヴォルティンク男子は人気者の独壇場だった。残る障害飛越とヴォルティンク女子は大方の予想を裏切ることはない結果となった。